

下落合みどり幼稚園 月報

2026 年 9 月 Vol. 69 No. 5

新宿区中落合 4-3-1 TEL 3953-6112

「ロック・マイ・ソウル」

下落合教会牧師 有住航

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかな麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。」

(ルカによる福音書一六章一九―二二節)

子どもの頃から毎年夏になると参加していた神戸YMCAが主催する余島キャンプでは、たくさん歌を歌いました。朝起きたらみんな夕方、食事の前にも、食後にも歌い、午後もたくさん夜の、とにかく一日中歌いっぱなし。マイ・ソウル」という歌がありました。

♪

ロックマイソウル
みんなであうたおう
オーロックマイソウル

覚えやすく親しみやすいメロディーのこの曲をこどもたちは大好きでした。当時は知る由もありませんでしたが、この歌には元ネタがあります。人類の「原罪」と呼ぶほかに、奴隷制を生きたアメリカの黒人奴隷たちは、

その過酷な生のなかでたくさん黒人霊歌(スピリチュアルズ)を歌い遺しました。そのなかに「ロック・マイ・ソウル・イン・ザ・ボソム・オブ・エイブラハム」という歌があります。「アブラハムの懐(ボソム)で」というタイトルのほかにも分かるように、この曲はルカによる福音書一六章に描かれる「金持ちとラザロ」の物語から着想を得ています。ぜいたく三昧に暮らし、じぶんの家の門前に今にも死にそうな人がいることを気にもとめなかった金持ちの男が死後に陰府で苦しんでいるのと対照的に、極貧のなか路上で死んだラザロは死後に宴会の席におり、「アブラハムの懐」で心よくまで食事ができ、安息することができるとこの物語は伝えていきます。

奴隷制を生きなければならぬじぶんたちの魂を、アブラハムの懐に抱かれていたラザロのように「ロック」してくれと神に願う作者不明のこの歌は、ルイ・アームストロングをはじめおおくの黒人歌手たちによって歌い継がれ、おどろくことに神戸YMCAのキャンプソングとして歌われ、こどもたちの心にまで届いたのでした。

歌には時代を超えて働くちからがあります。毎日たくさんの方の歌声がひびくこのみどり幼稚園の生活のなかで、こどもたちがそれぞれの歌に込められた思いを五感で味わいながら、歌と共にのびやかに育ちゆくことを願っています。